

真球のメタファー

あるいはバロック的なものについて

加藤 薫

高校時代までを鎌倉で過ごした私にとって、年に数回父に連れられ銀座に遊びにゆくのは大人の世界を覗き知るといふ意味でとても楽しいことだった。祖父の代から小石川で生まれ育った父にとつて焦土と化した東京から逃れるために鎌倉に居を構えることになったとはいえ、心は江戸っ子のままであり、それでいて下町とは風俗を異にするハイカラな銀座風俗にも精通していた。菊屋でパイプ談議をし、虎屋でチロリアン・ハットの飾り羽根の形を論じ、渡邊で浮世絵を吟味している父のそばでわかりもしない耳学問に精をだしていたというわけだ。お定まりのコースはイエナで洋もののピクチャー・ブックを購入し、キンタロウでおもちやを買い、その後昼飯時なら資生堂パーラーで表面がきれいなキツネ色にこげ目のついたマカロニグラタンか、和食なら橋善で厚さ五センチはあろうかというかき揚げ丼を食べ、小川軒でお土産にクッキーを買って新橋から横須賀線に乗って家に帰るというものだった。

柄にもなく三十年以上も前のことを憶いだしてみたのは、私と真珠との出会いもこのころに遡るからだ。銀座探訪はそれなりに楽しいものだったが、現在も四丁目の交差点にある和光（頭のなかでは服部時計店のイメージと混乱している）に入る時だけは緊張した。向い側にあつた三越とは違い、人影もまばらで店員にも気品が感じられ、今では死語となつてしまつたような店の風格といつたものを大事にしているようで、それらに圧倒されてたのだろうか、子供心にもスニーカーにコットンパンツではいかにも場違いだなとおもいつつ、時計売り場などを徘徊したものだった。宝石にはそれほど関心があつたわけではなかったが、横文字ばかり並ぶ宝石貴金属売り場で鉱石の名前やカットの違いによる様々な名称、色や発色の違いを観察するのを結構楽しんでた。なかでも真珠売り場はかなりのスペースを占めていたと記憶する。そしてこの真珠売り場では当時どうしても理解でき

ないことがひとつあった。西欧から輸入されていた大粒でデザインも複雑、しかも色彩鮮やかな真珠製品が、その横に並ぶ小粒で野暮ったい御木本パール製の製品の価格と比していかにも安く感じられたのだ。店員の人からはそれら外国産のものがバロコとよばれ、”歪んだ”真珠を使っているため、どんなに細工や光沢がすばらしくても、完全な球体を好む日本人の感性には合わないために評価が低く、価格もそれなりに安く設定してあると教わったのだが何か釈然としないものがのこっていた。

前置きが十分長くなってしまったが、こんな昔の記憶を引きずり出しているのも、最近、現代という時代の文化現象を象徴するキーワードとして、”バロック”という言葉が美術や文学に限定されない様々なジャンルに登場し、論じられるようになってきているためでありそのバロックの語源が真珠にあるからである。現代のバロックは、ひたすら自由をもとめる近代人の最後の敵としてたちはだかる道德的に正当とされる判断、既存の原理原則や体制といったものに対峙する思考、あるいはその表象を積極的に評価する精神の総称である。この意味でエスニティーの問題やキッチュな文化の問題も原爆や生態系破壊の問題もまたフェミニズムまでさえもバロックという意念をまとうことになるのだ。いわば現代の文

化現象を語る通底器としてバロックのチャンネルが存在する。リアルな問題をリアルなままに言ってしまう空虚さ——それはすべての芸術はフィクションであると言ってしまう味気なさに通じる——から逃れる願望として、現実の生活をバロック的と定義しながらアート化するところがおもしろくないわけがない。だがここではすでに過剰とも思えるほど氾濫しているバロック的なデイスコースへの欲望を満たすためさらに偏執的なバロック論、あるいはバロック的な言説を書き加えるつもりはない。とりあえずの興味は真珠なのである。そしてこの真珠へのこだわりが、すでに文献上は調べ尽くされてきたバロックと言う言葉の起源に関する議論の本質をなぞることになりはしないかと密かにももっていることなのである。

バロックのイメージの源泉として、語源的には「歪んだ大粒の真珠」を指すポルトガル語のバロコ(barroco)があったということは定説になっている。これにスペイン語の *barrocal* という言葉を並べて見ると、自然のままの、とか荒削りな、といった共通のイメージがうかがえてくるが、現在私達が通常使うスペイン語のバロコ (*barroco*) には明らかに意味上の逆転があり、人工的とか職人的マニエラを駆使した「芸術的」なものという感じに変質している。美術史の範疇ではバロックとい

うと通常西欧十七世紀に登場する絵画、彫刻、建築、工芸品など美術の様式概念として、あるいは音楽や文学といったジャンルでの現象も含めて十七世紀の共通の時代精神と定義し、論じてきた。現代のバロック論の主流（？）からして見れば、こういった美術史的なくり方方は偏狹で故意にバロック的なものの存在を矮小化しているとの批判の対象になる。バロックとは西欧（のみならず非西欧社会にまで）のあらゆる時代にあまねく存在するある精神の身振りであり、秩序や規範にのっとった古典主義に対峙するもの、ハイカルチャーに対するサブカルチャー、普遍主義に対する地方主義、正当に対する異端などすべからくアベラシオン（逸脱）に関与するもの、求心よりも拡散にベクトルが向いているもの全ての意識なのである。

避けようとしつつ、ついバロック論議にはまってしまった。当初の目的だった真珠の話しに戻ろうと思う。私の心にひっかかっているのは「歪んだ」真珠ということなのだ。

「歪んだ」という形容詞がついているということは「歪んでいない」、すなわち完全球体の真珠の存在というものが前提とされ、それを美しいとか正統なものと考える美意識とか価値観が存在していたはずではないか。

そして当然そこから真珠の様々な形態に関する認識的な記述とか、形態による価値の優劣の判断を加えた文献があつてしかるべきだと考えたのだが、浅学の故か、明確な記述、とりわけ「完全球体の真珠がすばらしい」というような記述がみつからないのだ。西欧の歴史の中に登場する真珠そのものに関する記述は古くホメロスの詩に登場しているそうだが、自分で読んでいないので真偽の確かめようもないのは情けない話だが、その真珠が真円球体のものかどうかまではわからないそうだが、だが実際にギリシャの人々が真珠を目にするようになったのはアレキサンダー大王の東征の際、ペルシャやインドから持ち帰ってからのようであり、さらに装身具としてつかわれるようになったのはエジプトのプトレマイオス朝、それも後期にあたる紀元前2世紀頃になってのことである。クレオパトラが耳飾りとしてつけていた真珠をアントニウスの前で飲んだ、という話は有名だが、その真珠の形がどんなものであったか、またプトレマイオス朝時代の人々がどんな形の真珠に美や価値を見出していたかまではわからない。ローマ時代に大プリニウスによって編纂された有名な「博物誌」（「自然史」とも訳される）に出てくる真珠の記述は大きさや構造について詩的に描写しているが、あいかわらず形態に対する価値観は反映されていないようだ。

ところでこのローマ時代から真珠についての表記が二つにわかれる。英語で真珠のことを一般にパール(pearl)と呼ぶが、これはラテン語の *perla* から派生したものである。しかし当のローマ人たちはギリシャ語で真珠を表す *margarita* を使っていた。マルガリータを英語読みすればマーガレットである。しかし幾つかやや大きめの英語辞典をめくって見ると、*margarita* と *margaret* を別々の項目でたてている。スペイン語でマルガリータといえば女性の名であることの他に有名なカクテルの名称でもある。テキーラベースにライムジュースを混ぜてシェイクし、グラスの縁辺に塩をつけたもの。やはり真珠のメタファーをもった飲み物であったのかと色々想像をめぐらしてしまう。酒の話になるとほとんど脱線してしまうのだが、つまりバロックの対立概念としてバロック以前より存在する古典主義のキャリアーであるギリシャやローマに非バロコ的な真珠、即ち真円球体の真珠を至上のものとしていたという証拠が、少なくとも私には今のところ見えないのだ。持ち論、真珠といえは球体のものが当然であったのでそのことをあえて指摘することとはなかったのだ、とも推測できる。となれば次には真珠を生む貝としてギリシャ・ローマ時代には何を尊重していたか、ということが検討されなければいけない。つ

まり真珠は分類上、真円、半円、無核と分けられるのだが、そのうち真円の真珠を産む貝、たとえばアコヤ貝など、しかなかったのか、他のものは無視していたのかどうかということである。何しろ天然真珠を産む貝も1000種はあると言われるとどうしていいかわからない。ともかくも、もしアワビのような一枚貝から採集していたのであれば、日本でも宮城産のものがるように、半円真珠であつたろうということである。ちなみに西欧伝承の中では牡蠣と真珠がむすびつけられている例は多いということやはり真円の真珠が多くあつたということだろう。

レトリックの問題として「へ歪んだ」という対比の発想はどこからきたのだろう。それは純粹に抽象的な幾何学的概念を適用してのことだろうか。あるいは「へ歪んだ」という概念の方が先に歴史に登場したということだろうか。でもそうであればバロック的なものが先に正統性を獲得したはずではなかったか。つまりバロックがその存在の拠り所とする反古典主義、反体制制、非正統的なものの復権、といった身振りも、対峙するものの存在が反証として提示できない以上、壮大なフィクションの上に成立しているとはいえないのだ。持ち論のことがバロックの真にバロックたる由縁であり、バロックが攻撃するロゴス中心主義への何よりの挑戦なのだとはいわれれば引

き下がる他ない。しかしバロックの持つ中心の喪失、あるいは空虚な中心の物語は最初から自律したものであったのだろうか。

真珠はそのメタファーとして水と月、女性、よりの確にいえば女性の性器とむすびついており、呪術信仰や薬として、また美食の対象として使われてきた。女性性器との形態的な結びつきを考えれば、この場合の真珠がバロコ的なものが前提とされていることは容易に想像がつく。そうなのだ。バロックは最初から「女性」性原理と深く結びついていたということだ。とすればフェミニズムの台頭する現代においてまたバロック的と称する表象が復権してきたのも当然のことと言えよう。完全な球体の真珠はこの場合「男性」性原理の象徴ということになる。牡蠣もまた女性性器の象徴としてあつかわれてきた。そしてこの牡蠣とその中に鎮座する真珠の関係は聖母マリアとキリストの関係によく例えられる。この関係をキリスト教の起源とからめて歴史のメタファーとしてよみとれば、牡蠣＝ヨーロッパ＝女性を母体としてその中心に真珠＝男性が新しく産まれたということになる。おそらくオリエントには真円真珠が存在していたのだろう。しかしそれはヨーロッパにとっては別の世界から後になってはいってきたものということになる。大航海時代の

成果がビジュアルな形で定着し普及し始めたのは十七世紀にはいつてのことである。このころになると世界の五大陸は寓意画という形で表現されるようになった。そして語源的には「満月」を意味しすべての土地の母である太女神であったエウロパ（＝ヨーロッパ）は男性の姿に置き換えられ、黒い肌をしたアフリカや裸身のアメリカをあしもとに跪かせている図像表現が一般的になっていく。十分調べてはいないのだが、このエウロパの寓意図像が女性から男性に変身してゆく過程はまた西欧にオリエント的な男性原理をメタファーとして持つ真円真珠が普及し始めより高い価値があると認識されてゆくプロセスと対応しているのではないかとおもっている。だからこそまたヨーロッパの基本原理であるバロコ的なものもまた同時期に自己主張をはじめたのではないか。

キリスト教の聖人聖女にかんする伝承、伝説、記録にかんする資料は実に多い。そしてそれら資料のいくつかを詳細に眺めてゆくと、また出生のいかがわしい（キリスト教的な見地から見るということだが）聖人聖女もまた実におおいことにはびっくりさせられる。その中の一人に聖マルガリット（マルグリット）という殉教聖女がいる。この人、実はキリスト教徒ではなく、アフロディテ、ペラギア、そしてマルガリータといった異教の神々

の特徴を備えた伝説上の人物である。ギリシャ世界で考えられていたマルガリータはアフロディテが現れた時、その身体から滴り落ちてきた真珠の滴、その真珠の門が意味する女性性器そのものの女神であった。マルガリータのマルガはまたサンスクリット語の *malaka*、すなわち天国に通ずる「道」とかタントラの賢人が利用するシャクテイの女陰の「門」を語源としているとも言われるし、同じような発想は中国にも太母のヒスイの門と呼ばれる生殖器の入口を天国への入り口とする伝承にもある。人間が生まれる時と死ぬ時にくぐるこれらの門がギリシャでもインドでも中国でもすべて真珠で縁どられていたということは興味深い。英語でたどってゆくとやはり「天界の門」といった意味の表現がありこの場合は *Pearly gate* とパールという単語が使われている。これも女性の性器のメタファーである。

英語でいづごろからパールという単語が使われはじめたのか調べはついていないが、すくなくともケルト語にはないようだからやはり海に精通していたローマのラテン語から派生したという説は有力である。しかしケルト人たちが真珠を知らなかったわけではなさそうだ。英語とケルト語の関係やケルト語とラテン語の間の歴史的な影響関係についてはほとんど知らないので、言語学を研究

なさっている人から見れば時間の前後もわきまえない単なる夢想的な遊戯としか思えないだろうが、次のような類推も門外漢の発想としてお許し願いたい。ラテン語で「道」とか「入り口」、ひいては「関門」という意味を持つ単語に *caula* という単語がある。ケルト語っぽい言葉で何か対応するものはないかと探っているうちに *cauldron* というものに出くわした。これはエジプトにもアフリカ人の間にも、バビロニアにもヒッタイトにもまた北欧のオーデン神話のなかにも登場する（再生の大鍋）のことである。そしてこの言葉はほとんどのインドヨーロッパ語の起源であるサンスクリット語の中に登場し、ヒンズー教では創造、生命、死の三相を司るとされる女神カーリー (*Kali*) と関係がありそうだ。大鍋といえは魔女そのもののシンボルであり、また様々な秘儀に使う重要な道具である。そして魔女といえはこれは反キリスト教のシンボルである。事実、大鍋の表象はキリスト教のシンボルである十字架と対極にあるものと見なされてきた。十字架が過去、現在、未来へと終末に向かって直線的に進行する時間のシンボルと考えるならば、丸い鍋は輪廻再生のシンボルであり、それは太母神の子宮なのである。ケルトの女神ケリトウェンを祭るため、ケルトの神殿には常に聖なる大鍋が置かれていたという。ウェールズの詩人タリエシンの詩『地獄の苦しみ』(

(Preiddeu Anwn) という作品の中には「・・・大なるヘリに沿って真珠がちりばめられている。」(訳はウォーカ著邦訳「神話・伝承事典」、大修館書店、『大なる』の項より) という箇所があるそうだ。つまりケルトの聖なる大鍋には真珠があしらわれていたものがあつたということである。だがしかし、それら真珠がどのような形をしていたのかはいぜん不明である。数は少ないが現在にも残っている大鍋の遺物には華麗な金属装飾と彫刻が施されているものは多いが、真珠を残したままになっているものにはまだお目にかかっていない。ケルトの神殿ではこの大鍋と共に海の女神マリ(マリーナ)と関連する象徴もまた捧げられていたというから、もしかしたら真珠はそちらの方であしらわれ、儀式の際には大鍋と対になってつかわれていたのかも知れない。

キリスト教で使われる聖杯にたいして *escuele* という元来は大鍋を意味する言葉が充てられている。赤いワインを注いで飲むイメージは、カーリーが手にしていたといわれる「血の壺」を想起させるが、この聖杯がキリスト教にあっては「死」と密接な関係にあることは知られている。ユダを含めた弟子たちと最後の晩餐を共にしたキリストが一番後に手にしたのは聖杯だったし、アーサー王の伝説でも円卓で唯一空席になっており、選ばれた騎士しかすわることのできなかった「危険の座」

(*Siege Perilous*) に座ることのできたサー・ギャハドの死は、探究していた聖杯との出会いによってもたらされた、と記憶している。しかしこういった聖杯がどのようなものであったのか。幾つかの初期キリスト教美術の画集や文献をさがして見たが、真珠をあしらったものはなかった。おそらく異教との習合過程ではともかく、後世になると聖杯はキリスト男性原理が杯女性原理を支配する象徴となり、もっとも女性的なシンボルである真珠など切り捨てられたためと考えられる。そういえば数年前に観たインディー・ジョーンズの映画シリーズで聖杯を探す話しても、真の聖杯が一番地味で装飾のないものだったことは、この映画が主演ハリソン・フォードの男くささとアクションで人気を博していることと絡めて考えると興味深い。とは言え、ローマ帝国崩壊後十一世紀頃まで複雑な民族移動を繰り返してきたヨーロッパ全域について一般化できるかはまだ自信はない。

どうも西欧における真珠の存在は西欧内部の古層に存在する女性原理と深くかわっていたと想像できる。そうなれば女性性器と形態的に近いパロコ的な真珠こそ正統なものということになりはすまいか。真円球体の真珠はこの意味で真珠であることからもっとも遠い真珠ということになる。真円真珠は両性具有のシンボルであ

り、キリストのような場合は男女の性差を昇華した存在としての象徴に転化される。逆に暴虐と殺戮を繰り返した狂暴な男性的イメージを持つローマ皇帝ネロは、一方でことの他真珠を愛好したことから、終生母親コンプレックスから逃れることの出来なかった、もつとも女性的男性という解釈が成り立つ。そんなところからもネロが身につけていた真珠はどのような形のものであったのだろうか知りたいところである。

バロコに「歪んだ」という否定的な形容詞がオーバーラップしてゆく過程はおそらく西欧における男性原理が優位性を獲得してゆく過程と対応していたのではないだろうか。いずれにしても真円球体の真珠は、真珠の元来持つ真珠の真珠性からしてみれば絶対矛盾なのである。真円真珠により高い価値を置く感性の存在に対してもっと社会学な―それも近代との絡みで―考察がなされれば何か面白い相がみえてくるのではなからうか。

主義的なものへの対抗原理として創り出されてきたものではなく、それ以前にすでに存在していたものだったのであろう。そしてバロコ的なものこそ西欧思考の「実体」(こんなものが存在すると考えることこそ近代の病気なのだとバロコの賛美者は考えるのだが)そのものである、古典主義的原理こそ人間の理性を賛美する壮大なフイクションの体系であったと言える。

どうやら紙幅も尽きてきた。後二つのことを述べてこの雑文を終えることにしよう。ひとつは日本人が真円真珠を好む感性についてである。どうもこのタイプの感性が日本に古くからあったとは考えにくいのだ。その例として考えているのは日本人の陶器への好みと鑑賞の方法との対比である。日本の陶芸作品のもっとも陶芸的な評価はどこかはずした不完全性にある。微妙な歪みや人為を越えたところで発生した傷やしみ、垂れ、といったものに作品としての「味」を見いだしてきたのだ。利休の賞賛した井戸の茶碗もそれがどこか欠けていたからに他ならない。という一方で私達が景德鎮で制作された中国産の白磁や青磁を評価する感性はどうなんだという反論も想定できる。私見ではその種の感性は純粹に技術的な水準への賛美からきていると考えるのだ。何代にもわたってひたすら技術的な完璧さを追求してきた中国青磁や白磁の狂いのなさは賞賛に値するものだが、その技術的なものをのぞいた場合、はたしてどの位日本人にうけいれられるものなのか疑問である、事実美術市場においても稀少性や日本独特の市場メカニズムということが加味され中国陶磁器の古い一級品は価格的に一応高水準にあるが、日本の陶芸作品に比べれば相対的に評価も低く流通も少ない。このことから類推すれば、真珠の世界に

おいても色や光沢、厚みよりもまず真円であるかどうかという形態的な評価が先行するようになったのは、技術面が重視され何らかの標準化できる規格が必要とされるようになった、養殖真珠工業の発生する明治末期以降と意外と最近のことではなかったかと考えている。この点については追々考えてゆきたいと思うのだが、ふりかえてみれば、あの銀座四丁目の和光で眼にした真円の御木本パール値段は、日本人の感性や文化を含めた近代化そのもののメタファーだったのだろうか。そう言えばバロック文学の中に奇想体（コンセプティスモ）の代表としてゴンゴラ調という修辞法がある。大胆な省略、機知と思いつき、引用と暗喩のちりばめられた、それでいて明快な詩は、突飛と思われるかも知れないが私には日本の禅問答のような自由で流動的な発想（禅とはそんなものではないとしかられそうだが）と共通点を見出している。さてどんなものか。ゴンゴラ調といえ、十七世紀メキシコにひとり卓越した才能を開花させた女流詩人ソール・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスがいる。スペインの詩人ゴンゴラ・イ・アルゴテの名は実に彼女の存在によって何倍にも増幅されたといつてよい。彼女の存在もまたメキシコ文化の真珠というメタファーとして定義づけられるのだが、とりあえずは宿題ということで次に移ろう。二つ目の点とはこのバロック文学の至宝ともいってよ

いソール・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスを生んだメキシコ、そしてそのメキシコを含むラテンアメリカ、あるいは非西欧社会全般におけるバロックと真珠というところである。ここではとても非西欧社会全般にまで話しは広げられない。見体的にはラテンアメリカのバロック現象だけでも考えてみたいのだが、そもそも十七世紀も含め、ラテンアメリカの植民地時代の文化、いや今日で先スペイン時代も含めたラテンアメリカの歴史的存在そのものが世界史の中でバロック的であるとも考えられている。ラテンアメリカのバロック論を展開し批判する余裕はここにはないが、その特徴を一言でいえば、まず西欧におけるようなバロックの対立概念として強力に立ちあがる古典主義的なものの非在の上に成立していること、西欧のバロック概念と共通する点以上に異質な点も顕著で、いわばバロックのバロックという存在になっている。レトリックとしてバロックのバロックは古典主義にもどつてしまはずだがそうならないところがラテンアメリカの特質となる。しかしこんな具体性を欠く思弁の結果の抽象論をいきなりぶつけられてもとまどうばかりであろう。私の興味もまた真珠なのであるから具体例に絞ることにしようと思う。

メキシコの首都メキシコ市から東に約百二十キロ程離れたところにメキシコ第四の都市プエブラがある。コル

テスによる十六世紀のアステカ帝国征服以後、スペイン人入植者のために新たに建設された多くの人工都市だが、この街の中心広場から二ブロック程離れたところにサント・ドミンゴ教会堂がある。十七世紀に建てられたメキシコ・バロック建築の最高傑作と評価されているが、その名声をさらにたかめているのが、教会堂左翼部に付属して作られたロサリオ礼拝堂である。このロサリオ礼拝堂はある特定の個人や有力ファミリーのために建てられたものではない。プエブラ市からさらに、東に約二百キロ離れ、海に面した港湾都市ベラクルスの真珠採集組合と、そこから運び込まれた真珠を加工して装飾品に仕立てあげる貴金属宝石職人組合の共同寄進により、真珠業に従事する職人およびその家族のために作られた。ロサリオの起源は聖ドミニクスの受けた啓示にありとドミニコ修道会では主張しているが、一般にはその故事より古くから存在したことが知られている。時代を遡ってゆくと一番古いところではヒンズー教のカーリー女神が身につけていたジャパマラ（バラの数珠）であると考えられている。白と赤の珠があり、白が優先的な意味を持つ。ここから真珠が使われるようになったと推定される。ところでロサリオの輪は時間の連続、とりわけ空虚な時間の繰り返しを象徴するとの解釈がある。すなわち「死」の無限連鎖の象徴ということになる。ロサリオはまた音

韻的に近いローズ（ばら）の象徴ともかなり近い意味をもっている。教会建築でゴシック様式の登場以来明確になったバラ窓は、東の方向におかれた祭壇と十字架、すなわち男性原理、と対極の方向である西側に面して開けられる。ところがこのサント・ドミンゴ教会堂にはバラ窓がない。そして主祭壇は北側に置かれ、ロサリオ礼拝堂は西側の一角すべてを占めている。細かい推論の過程やほかにも露見する様々な断片への論考をはしょって結論だけいえば、つまりこの教会堂の空間は女性性の原理で支配されているのだ。この前提にたつてロサリオの聖母を飾る真珠の形を検討していこうと思っているのだが、この先は別の機会に譲ろうと思う。ここまでおつきあいいただいた方々はここロサリオの聖母のために使われている真珠がどんな形だともっていますか？